

No.25 April 1998

特集 母性と宗教

Woman Spirit

逐次刊行物
平 10. 4. 13 歳
国立婦人教育会館
婦人教育情報センター



フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

特集 母性と宗教

現代における母性と宗教の可能性	榎村 愛子	1
チャネリングと女性像	小松 加代子	4
母性と宗教	申 英子	8
母なるもの マザーテレサに惹かれて	木内 祐子	12
女性の性差別の内面化の現実	渡辺 典子	16
在日アジア人との共生のために	パク ウイリヤ(仮名)	18
領いてくださいますか	山田 恵子	23

例会報告

九月二十八日『「従軍慰安婦」と宗教の位置』池田恵理子さん	28	
十二月十四日『仏教のなかの性差別―曹洞宗の場合』中野優信(優子)さん	33	
前号(NOS4「暮らしと宗教」)への感想	たかはしとしえ	37
新刊書案内		
『「日本万歳!」史観を問う』富山妙子・松井やより他	38	
『烈士の誕生 韓国の民衆運動における「恨」の力学』真壁祐子著	39	
『パンク坊主宣言』蓮月(藤谷不三枝)著	39	
『マイノリティとしての女性史』奥田暁子編	40	
『国際分業と女性』マリア・ミース著、奥田暁子訳	41	
活動報告	42	
編集後記	43	

表紙台字 松尾紀子/シンボルマークは「霊」を表す象形文字です。

現代における母性と宗教の可能性

樫村 愛子

私は精神分析について勉強しているので、「母」なるものは自分の研究の中心的テーマなのだが、「母」なるものと「母性」は概念的に異なるものであり、「母」なるものの機能と、それがたぶん社会的に意識化され表象された「母性」という概念の関係それ自体が一つの研究対象となるのだろうと思う。この場合、「母性」という概念には、近代になって育児の共同体機能が失われ、母親による養育が規範化されてきた事情が関与しているだろう。すなわち、この事情においては、フェミニズムの言うように、「母性」は中立的概念ではなくイデオロギー概念であるということになる。ここで、通常構築主義の立場に立つと、私が依拠する精神分析のいう「母」なるものもひとつの文化的構成物ということになるだろう。私もそれには同意するが、しかしとはいえこの原型的な「母」なるものの指定は、人間の生物学的条件において必然的に避けられないものであることを、私の立場では前提とする。それについての説明は、ここでは紙数を越えるので省

略せざるをえない。

ここで、母性に戻ると、しかし、母性の表象ということを考えるとき、興味深いことは、そもそも表象は現実の反映ではなく、現実の危機の隠蔽として現れることが多いので、母性の表象が他の問題のすりかえ的な表象として登場することは考えられる。私は、近代初期に登場した「母」の表象は、むしろ共同体の解体の危機に際し、共同体の危機の表象を母が代理していた可能性も高いと思う。例えば、近代初期先進国では、軒並み映画などにおいて「母もの」ジャンルが登場する。日本でも、『醜の母』は前近代の物語かと思っていたら、同じように近代初期アメリカで生まれた母ものに影響を受けて日本でも作られた物語であった。そしてこの「母もの」は、一過性のごとく出現すると同時に短い期間で消失した。私はこの現象のありようを見ていて、精神分析でいう「移行空間」なるものを見たい浮かべた。「移行空間」とは、フロイトを経由してウィニコットという精神分析家が発見したもののだが、子供が母親から自立していくときに、母親の代理物を、毛布の切れ端や、人形や、おしゃぶりなどによって確保する空間であり、母親から分離するためにこそ必要な移行のための空間である。「母もの」は、このように、近代になって共同体から人が切れていくとき、そ

の移行空間において代理として表象されたものであり、近代的な（養育者としての）母親の発見がそこに転用されたものではないかと私は思うのである。つまり、『醜の母』の郷愁とは母親への郷愁ではなく共同体への郷愁なのであり、（養育者としての）母親の発見と発明と同時に、これを母親への郷愁に転化したものではないかと考えるのである。

近代、この母の表象は、またさらによりリアルな母の身体の表象へと移行していく。フロイトの「外傷」概念をオットー・ランクは出産時の外傷にまで遡らせたが、この系譜は、心理学的知識を利用する宗教に受け継がれており、サイエントロジはこれを使用してゐる。ここでは自己の心の傷が、母の身体との関係で規定されることとなる。そしてここでもたぶん、このような母の身体の表象が、実際には、自分の身体の統合不安のメタファーとして転用されている可能性はあるだろう。というのも、重度の精神患者は、母親の身体メタファーを通じてやっと自身の象徴化統合が可能となるからである。つまり母の身体表象が前面に出てくると言うことは、近代の母ものが共同体の危機を内包していたように、自己統合の危機を裏側に内包しているということとなる。が、ここに至っては、母が自己の危機的表象を代理しているという言い方も

怪しくなってくる。なぜなら、そもそも自己の表象が最初に基底としてあるのではなく、精神分析の教えるところによれば、自己より前に母親のイメージが形成されるのであり、自己とは母の鏡像物で、そちらの方が起源は先である。さらには、自己の内実よりも身体イメージが先にあるので、母の身体イメージ形成が起源にあるからである。

つまり、現代は、現実の危機に対する表象も極限にまでできているということもできるだろうか。先に見た共同体も、精神分析の側から見れば、原型の母なるものの文化的転形物であり、それがどんどんリダクションされつつあるような気がする。すなわち、この母の身体から文化的に遠ざかって構築されてきたものが、また科学時代に原型へ戻ってきたということもできるだろう。が一方、未開時代に母親の身体を文化的に現在の科学的なイメージで表象できたわけではなく、すべての言説は宗教的な世界観と深くつながっていたので、文化的な科学的な母の身体を取り出しが可能となったのは、やはり近代だったのだと言うこともできるかもしれない。

このような前提のもとで、私は始めて宗教と母性というテーマにとりかかれるのだが、そういう意味では、このテーマは一筋縄ではない。さらに、母性について

は、とりわけクリステヴァのいう、アブジェクション（母なるものへの攻撃や排除）が重要なテーマとなる。ここで宗教史を振り返ると、未開時代では、母なるものはひたすら恐ろしかった（クリステヴァのいうアブジェクトの対象であった）し、ユダヤ教やイスラム教のような、超自我―怒り命令する父の宗教は、この母を引き受けなだめて登場し、父は母を追放しコントロールした。キリスト教は、この父を殺して再度母を登場させた。一度遠ざけられた母がもう一度より受容しやすい形で可能になり、マリア信仰に見られる、マイルドな母の表象は、女性への恐怖をすっかり解毒し飼いや慣らしきった。たぶん仏教は、未開宗教とユダヤ・イスラム教の間くらいにあるのだろうが、大越さんたちが論じられているように、女性の排除はキリスト教より甚だしかった。

ここで、アブジェクション、表象と現実の関係、父の問題など多様な変数を見ながら、いつかもう少し私なりに整理してみたいと思つていふことだけ述べて、現代の問題を最後に述べておくなら、現代、確かに出生外傷のメタファーで語られるような、統合危機があることは推測できる。予め宗教はこの危機を独自の表象世界で回収してきたのだろうが、近代以降の母の身体の表象は、不安定さに満ちている。現在それを

支えているのは、近代母性イデオロギーという宗教だけれど、それはあまりに脆弱である。また特に攻撃性が表象されないもので、抑圧は蓄積される。近代イデオロギーの弱体性は全て負の部分の表象のなさに基づいているが（マリアの優しささえ神の死とセットだった）、フェミニズムの母性批判は、潜在的にはこの攻撃性の解放を行つてもいるだろう。では今後どのような可能性があるのか。母の身体からどうやって先に行けるのか。母性批判を経由した人はみんな手探りである。自分の出産体験、育児体験を振り返つても、まさに幻想は不気味なところに宿ると言うが、それは最もグロテスクな場所がピュアーなイデオロギーとセットになつている空間だった（死と同じである）。イデオロギーの回路がほとんどなかった私にとつては、ほとんど人間とは思えないもの（*enfant* 論として最近展開されている議論だが）がおっぱいを飲んだあとエクスタシーに陥つているのを見るのは、恐ろしく不気味な享乐的体験だった。ここからどのような広い意味での宗教的・倫理的共同性（関係性でもいいが）が構築されるのか、私はまだ十分詰めて考えてはいないが、まさに人間の条件の中にやはりその可能性は胚胎していることを信じざるを得ない。

チャネリングと女性像

小松加代子

精神世界という領域が注目されてすでに十年以上たつ。書店に行けば、精神世界のコーナーがたいていあり、いろいろな種類の本が並んでいる。その中に、ベストセラーとなった『聖なる予言』に見られるような、「新しい生に目覚める時代がやってくる」とするある意味で未来に対して希望的な考え方があつた。そうした傾向を持つひとつ、プレアデス星人とのチャネリングを伝える本を最近読む機会があつたので、その中で女性像がどのように用いられているかを考えてみたい。そもそもチャネリングとは、「普通の意識状態とは異なる源から情報を得ていると信じている人によつて、そうした情報が得られ、表現されること」だといふ。ここでは、その源が普通の状態では接することのできないものであるかどうか、どのようにその情報を受け取っているのか、その情報が正しいのかどうか、については、全く考慮しないことにする。むしろ、チャネリングを通して表された情報が、何を伝えているのかの方に興味を惹かれる。

チャネリングは一九六〇年代にアメリカで広まり、今ではアメリカ国内で、チャネラーは数千人にもなるだろうという。シャーリー・マクレーンの『アウト・オン・ア・リム』でもチャネラーが登場し、チャネリングという言葉は一躍有名となり、賛否両論を巻き起こしている。

一時のブームは去つたとはいふものの、今も根強くチャネリングを通しての情報を伝える本が出版されている。先日手にした本は『プレアデス 銀河の夜明け（コスモ・テン出版）』という本だが、おもしろいことに、プレアデス人からの情報は、この著者のバーバラ・ハンド・クロウだけでなく、その他のチャネラーにも伝わっている。日本語に訳されているものに、バーバラ・マーシニアックの『プレアデス十かく語りき』『プレアデス十地球をひらく鍵』がある。どちらも互いがプレアデス人のチャネラーであることを知っており、また、それ以外の人のチャネリングにも共通点があることを強調している。

いずれの本においてもプレアデス人は地球に住む私たちに、すでに惑星間の波動の変化は始まつており、二〇一二年には一つのサイクルが終わり、そこで新しい文明が始まると告げ、その際に宇宙の大パーティがあり、そこに参加できるよう変化することを勧めてい

る。

そこで求められている変化とは、人間が自己に目覚めることである。今現在私たちが目にする宗教は、どれも救いを外に求めるものとなっている。キリスト教は神を外に設定し、救い主の到来を待っている。しかし、神を外に求めている限り、人間の進歩は見られない。実際のところ、人間は無限の可能性を持っているのだが、自分で自分自身の限界の壁を作り上げてしまっているために、それに気づかないでいるというのである。自分の中に、自分を変革し社会を大きく変える力があることが強調されている。

それではなぜ人間はそれに気づくことができないのだろうか。その理由として説明される事柄のいくつかは、キリスト教および教会の批判となっていることが注目される。キリスト教及び教会の問題点としてあげられているのは、次のようなものである。

① 強迫観念

非常に制限の強い信念体系を作り上げてしまった。自分の外に「神」を作り上げ、その神に対する強迫観念で満ちている。自らを罪深く無力な存在と考え、外側に救世主の到来を待つという態度が身についてしまった。

② 家族間の感情のもつれ

外側に存在する神を「父」と考えることによって、

実際の家族の中に不均等な関係が作り上げられてしまった。次のような言葉で説明される。「あなたがたは自分の父親を愛してきませんでした。父なる神が、本当の父親にむかうべき愛情を盗み取ったからです。」

p.1471

③ 男性の去勢

さらに、性を否定することにより、禁欲が美德とされてしまった。「ローマ・カトリック教会は、キリストが独身だったという前提に基づいて、司祭はすべて独身（禁欲）とさだめることが必要でした。女性の力を弱めなければならず、聖体拝領の祭儀は一度も女性の体内に入ったことのない男の司祭が執り行うようにしました。人々に死にたいする恐怖を植え付けるため、多くの転生に関わる知識を抹消しました。そうすれば、死への恐れが他次元との接触を制限するからです。」

p.2061

以上のような説明に見られる、キリスト教、特に教会組織が人間を間違った方向へと導いてしまった、という考え方は、キリスト教批判のように見える。しかしながらイエス・キリストの存在意義自体は否定することはしない。イエスは大きな使命を負って来たのにもかかわらず、人間が重大な意味をもったキリストの存

在の意味を取り違えてしまったのだとし、そこに地球人以外の世界統制チームの陰謀を語る。この陰謀はさておき、こうしたイエス・キリストの意味の取り違えという考え方に、単なるキリスト教の否定ではない、キリスト教文化に生まれ育った人々のキリスト教という宗教への思い入れと、その中でも満たされない思いがうかがい知れるように思われる。

それでは、新しい文明を築くために求められる女性性とは、いったい何なのだろうか。

① ガイアとの共鳴

この時期にプレアデス人が地球人に接触をしてきた理由について、次のように説明をしている箇所がある。「プレアデス人は性別という形の自己表現をしません。女神の守護者であり、たいへん女性的な波動を持っています。われわれが「女性」というとき、それはあなたがた各自のなかにあるガイアの部分をさします。人間は男女とも女神と神の両方なのですが、これまで地球には男性エネルギーが過剰だったので、人間全ての内なる女神をめざめさせるお手伝いをしようと、われわれプレアデス人がやってきたわけです。

p.401

人間の性格の二面性を語る際に、やはり男女という区分けが使われる。プレアデス人には性別がないもの

の、地球人に今まで隠れていた側面を女性という言葉で説明し、自然との共鳴できる能力を指していると思われる。新しく始まる文明は、環境に優しく、戦争もなく、中央集権的ではないとされ、そのために、女性のエネルギーが必要とされるといふ。

② 生命を創造する女性

女性であることの大きな意義は、生命を生み出すという点に見られる。「現在において未来を創造するのは人間のまったく新しい能力であり、それが一九八七年から二〇一二年にかけての決定的飛躍の本質です。時間と空間に制約されるのではなく、むしろ時空を利用するようになるのです。それが三次元の決定的飛躍です。女性は時間において創造し、新しい生命のために空間を活性化させる方法を知っていますから、男性を新たな錬金術へと導くでしょう。」 p.223

③ 月との共鳴

さらに、女性であることは、その肉体にすでに特殊な共鳴器官を持つていることでもある。「あなたがたの体内の精妙な分泌腺には金が含まれており、月の存在たちは地球の闇に隠された金を通じて、人間意識から放射される精妙な感情の波動を感じる事ができるのです。あなた方が宇宙からの放射を感じると、内分泌腺から金の結晶が放出されて血液に流れ込みます。

女性の方が一般に宇宙とのつながりが強いのは、月のサイクルごとにこの結晶が血液中に放出されているためです。pp.236-71

このように、新しい希望に満ちた未来を導くために、女性という言葉が大きな意味を持つかのように使われる。しかしながら、女性性という言葉を用いる場合、混乱を覚えることが多い。というのも、この例に見られるように、ある時には、人間であれば男女どちらも持つているガイアの側面として説明される。人間は無限に近い可能性をもっており、一人の人間の中に女神も男神も存在する。そして女神と男神の調和が一人の人間の中でとられることによって進歩が起こることなのである。

ところが、他方でこの女性性には、月経という肉体上の女性の機能にその根拠が由来するものも同時に含まれる。月経が宇宙とのつながりの強さを示し、出産を司る女性が生命の創造の時を知ることができるとするならば、そしてそれが故に女性をさまざまな儀式に参加させるべきだというのであれば、そこには性別役割がはっきりと示されているということができるだけだろう。それは男性は時に応じて女性の感性を重視し尊重すべきだという、男女別の割り振りがなされるだけのように見える。女性の肉体上の機能が女性の力をもた

らすとすれば、それは、男性はいかにして実現できるものなのだろうか。

「母性」という言葉と同様、女性性という言葉を用いる時点ですでに性別が前提とされ、しかもそれが強調され、尊重されているかのような錯覚を広めてしまう。とりわけ、それが肉体上の差異を越えて、抽象的な性格として語られる場合には、注意をしなければならぬだろう。

それでは、性別を示す言葉を用いないことが必要かどうかになるだろうか。そして実際にそれは可能だろうか。この点でもプレアデス人の情報は興味深い。本の中では、性別を持たない宇宙人の性格を説明する際に、地球では男女に振り分けられる攻撃的／受容的な性格が星ごとに分けられている。人間以上に進化した存在でありながら、その活動の仕方には人間の性格が投影されているかのようと思われる。従って、それぞれの宇宙人にも理想的な存在の姿を見ることはできない。理想的な存在は性別を越えるものなのか、あるいは二つの異なる性格が協調するものとして存在するべきものなのか、まだまだ私たちには答えが見えていないように思える。

母性と宗教

申 英子

母なる大地という言い方には、あまり抵抗を覚えな
いが、母性という言葉からイメージできるものは何か。
無限の愛（キリスト教的に言つて神の愛であるアガペ
ー）を注ぐものとして考えられたことがあつたとして
も現在は、母性がどういふものであるか混沌としてい
て、皆が納得しているものとは言えないであろう。

日本で母性という言葉の普及のきっかけをつくつた
のは与謝野晶子とされている。しかし、母性とは『女
性が母としてもっている性質。また、母たるもの』（『広
辞苑』）という定義そのものがあいまいである。なぜな
らば「母としてもっている性質」はそんなに明白なも
のだろうか。それなのに、母性とは、と言い切ること
に無理があるようだ。出産や医学の面からみた母性保
護という言葉なら抵抗はないが。

自分の子供の中に心身に障害を持った者とか、反社
会的な行動を起こす者がいたとしても母はその子を限
りなく保護し、犠牲的愛情を示す具体例から母性賛歌
は言えるとしても、逆に産むとすぐにコインロッカー

などに投げ込む母も多く出て来ている現在、母である
こと即ち母性を備えた存在であるということは自明で
はなくなつて来ている。

まして「母性と宗教」というテーマが与えられると、
ある宗教の原理や教義のなかの母性はどうなつてい
るのか、ということが一つと、その宗教の組織を有機体
と仮定すると父性と母性の関係はどう作用しているの
かということを考えさせられる。なぜなら「やさしさ」
と一般に言われる母性が有機体の内で蠢（うごめ）く
と、弱い者を保護するというより、体制を保つための
本能が敏感に働き出す。体制を守るためなら、「これ
は政治」だと公言しつつ、たとえ「隣人を自分のよう
に愛しなさい」「最も小さな者に神性は現れる」など
の教えに逆らつても弱者をつぶす。間違つた者の悪で
も限りなく赦すという、とんでもない甘えの方向に向
かつてしまう例があるからである。この限りなく悪を
甘やかす体質に加え、父性の厳しさの欠落といった面
から母性をみると、河合隼雄さんの、「日本は母性優
位の社会である」という説が、説得力をもつ。

たとえ教理や教義が父権的な宗教であつたとして
も、一旦、組織の内外にことがおきると、外の敵に対
しては一体となつて立ち向かうが、内側となると善と
は、より体制に近い者、組織の長に柔順な者であり、

その者たちには仲間意識からくる間違つた愛情を示すが、その反対側の者は悪と決めつけ村八分的扱いをする。

一方母性愛はやはり辞書で「母親が持つ、子に対する先天的・本能的な愛情」と定義されているが、無抵抗の子供から言わせると、母親こそ、自己確立の未熟な自分を底無しの泥沼に引きずり込む闇の存在ともなることを忘れてはなるまい。グレートマザーという表現の定着や、すべてを飲み込む魔性的存在の分析もかなり一般にされてきている。学校を卒業し結婚、子育てを終え、カウンセラーの資格をとろうと自らが教育分析を受ける四、五十代の女性のほとんどは、意識の下に埋めていた幼少時の母親からの心ない仕打ちの傷を引き出され、泣きながら辛かったことを告白する。しかし、過去にやられた悔しさを今こそ母親に言うにしても母親はあまりにも年をとりすぎて闘う相手ではなくなっている。この事実により再び打ちのめされると言う。

母性という言葉が危ういもうひとつの例が、天皇制と結び付き、母性の名を借りて若者を戦争へ駆り立て異民族を殺すという積極的な戦争加担であったのではないか。「母性が『女性の権利』や『母である』状態を離れて抽象的な観念として一人歩きを始めると、昭

和の十五年戦争では天皇制と結び付き多大な犠牲と無限抱擁の母性賛歌が溢れだした」(加納実紀代)。

私が自分の「女性として、在日外国人として」の存在を明確に出しても、あえて出さなくとも、事柄の是々非々をはつきりするよう主張すると組織は排除する母性に変身し、問題を感じ痛みを表明するこちらの言いつ分を聞き、どんな大きな圧力からも無限の愛情をもつて守ってくれるものとはならない。曖昧さをよしとし、身内の平穩無事をひたすら守る怪物に様変わりする。あげくの果て、弱者をつぶし問題を起こした者の責任の所在はうやむやにされ、かれの個人の確立など全くの不問で、組織という全体を包む母性のふところで見安穩としていられるのである(ほんとうは自己破滅への道行をたどっているのだが)。いや初めからそのような実態だったにもかかわらず、こちらが幻想を抱いていたのかもしれない。

ゆえにここで「宗教」と言う場合、「宗教団体の組織」と言い換え、「宗教組織と母性」との係わりと云った方が的を得ているようだ。なぜならば「宗教」こそ人間の存在の深淵を脅かす存在から人を解放するものであるはずなのだが、組織という形を持つと母性の最も悪しき面(和の論理)と癒着してしまいうらしい。

河合隼雄さんの言葉を少し長く引用する。

「日本は先進国と言われる中で、母性を保持している珍しい国です。父性と母性は一長一短なんです。父性が強すぎると、米国のように貧富の差がつきすぎ、激しい世界になります。むかしの日本の父は強かったといいますが、戦争に行つて戦う強さはあるが、「戦争はおかしいんじゃないか」と言い切るような強さはありませんでした。日本人はまず周りのことを先に考えてから行動し、場の調和を重視します。本当の父性は、「私はこう思う」と前面にでるわけですから、ちよつと違います。(中略)米国のような父性原理のありすぎる国では、救済する母性が弱いため、競争が激しく繰り広げられ、落後した人はとても惨めになります。母性原理の日本とちよつど逆の立場です。ただ、人はつぶされてしまうことがある。父性といつても、一神教の世界なら父は神の代理人だから明快ですが、日本では神様抜きで父性をどこまで作り出せるかも課題です」(毎日新聞、九八年一月十九日)

私の属する宗教団体は一神教の神を奉じる組織だが自身はもろに母性的である。四半世紀以上も(万博問題以来)大まかにAグループと問題提起者側のBグループとに分かれ、今までBグループがヘゲモニーを握つてきていた。しかし三年前の阪神・淡路大地震の時

に起きたある事件を境にBグループに対する批判勢力が大きくなり、大阪地方の組織もその渦の例外ではなかった。ちなみに私はA、Bのどちらにも属していなかったが大震災後Bグループの起こした事件とその処理のあまりにも自己中心的(暴力をふるつた仲間だけひとり反省を促さず、あまつさえ暴力をふるわれても、あれは暴力ではない、とまるで家庭内暴力の隠蔽みたいなことが起きた)なやり方に批判の意志を現した。またその後Aグループの者たちが起こした性差別問題を指摘し、そのグループからも疎外と無視を受けている(これもいったん仲間とした者の悪は見えない和の論理の体質)。とにかく昨年(九七年)の大阪の組織では役員選挙が予定され、いわばAB両陣営に属さない無所属の私を副議長にとの噂がまわつていたことから、私はまるで「魔女狩り」を思い起こさせるようなバッシングに出くわしたのである。

前議長のもとで書記をつとめるわけに行かなくなり上がり、常任委員(常置委員)を一年間務めたところ、総会の真つ最中に過去一年間の申の常置委員は無効であったと歴代の議長経験者たちがその日にはじめて会場で言い出し(勿論、私個人には一度も前もつて言つてはいないし、月例の常置委員会が一年間開催さ

れたところで全く取り上げられなかった)、現議長は彼らの言い分をそのまま認めて、私の意見は聞かないまま会場に謝るといふ信じられないことをした。四百人規模の総会の相当の部分が、申たたきの恐ろしい会議であったと複数の人が言っていた。

数日たつて会った議長は「申に差別をした総会であった」と謝つたにもかかわらず、その一ヶ月後、仲間との談合の結果、百八十度変えて私の一年間の常置委員は無効であり、総会が法的に正しかったと言ひ出したのである。自分が議長をして決議したことを自ら否定した矛盾も気が付かず、ましてや私(申)の存在などどうでも良かったのである。つまり守るべき組織の揺らぎ、言い換えると異質なものが入って現状維持が危うくなると排他的母性本能が疼くらしい。この時に確固たる父性原理から「常識にも外れた奇襲的な弱い者いじめは止めよ」と誰もブレーキをかけないのである。

またやられた外国人女性という弱者が面談を申し入れても会わないで屁理屈を書いてよこし、開き直っている。先のA、Bグループとも、自分たちの仲間なら暖かく包み、そうでない者には敵愾心を持つ。すべての人間をどちらのグループに属する者なのかを見計らつてから、付き合う。問題の是々非々ではなく、仲間

か、仲間でないか、身内か身内でないかが問題になる。ゆえにグループの恩恵に頼っている者にとつて、たとえ悪しき母性であれ、守られる母がなければ立ち行かないので、自らが属している組織を決して批判できないようになる。あたかも親に育てられた子がどんなに言いたいことがあつても逆らえなくなるように。宗教の世界だからこそはじめ大いなる愛を求めて行く側の期待は大きいので、そのずれやギャップが深く広がる。

このようなときに原点に戻って一神教の強みである「確固たる父性の原理」に立ち、論理も実践も展開すればよいのだが、誰も自分という個人がしんどい役目を担いたくないため、皆と歩調を合わせ組織を守ろうとする。すなわち問題を提起する少数者に対し組織を乱す悪者として口を揃えて攻撃する。それも事柄の本質は棚上げにして周辺のな問題にウエイトを置きながら。日本の社会のミニアチュア(縮図)みたいだ、この宗教団体のありようを表する者もいるが、つまるところ一神教であれ多神教であれ保身という身構えが出てくると逆らう者は飲み込んでしまふ母性の働きが顕著になる。むしろ先に少し触れたように、その宗教の教理に父性(男性性)、母性(女性性)のバランスがどのようになっているのかをまず問題にすべきではないだろうか。むしろ女性性と男性性と言つたほうが

「親」性が前面に出ている母性、父性より問題は複雑にならないのかも知れない。

そんなことを考えていたら、二人の人物のことが思ひ出された。一人は明治から大正の時代にかけて田中正造らに多大な影響を与えた新井奥邃（おうすい）。

「神は男女也。父母也。一にして二。二にして一になる真人也」と言った彼ならば、神を父としてしか、キリストを男としてしか見れない一神教は片肺飛行をしている様なもので、今ここにある危機そのものを飛んでいると云うであろう。宗教にとって母性を考えると、「おおもと」がどういう存在なのか宗教の本質を問い、信仰の中身を検討することと深く係わりがあると思う。

もう一人は昨年九月に召天したマザーテレサである。彼女は「マザー（母）」と名がついているが、一神教たるキリスト教の「確固たる父性原理」（＝最も弱い存在をキリストとして受け容れる）をその業、生きざまの中で生かし、一歩たりとも譲らなかつた。いやそのゆえにあの偉業は成し遂げられ、他宗教の人々にとっても「マザー」の存在であり得た。

宗教の根源的なことのひとつ、愛なる神の神性を「母」の形をとって「受容する者」と「厳しい自己制限を教える存在」として地球上の人間に伝えたのであ

ろう。

かくして母性は父性を含んで初めて意味があり、父性も母性の存在を忘れては旧時代の遺物として惨めな存在に留まるのではなからうか。願わくば宗教がこの真実をいつまでも生き生きと伝える存在でありますように。

母なるものーマザーテレサに惹かれて

木内 ゆり子

今年の成人式の朝、東京は大雪となった。前夜からの予報で心配はしていたものの、早朝にして、その積雪の量が十年ぶりの一人旅を躊躇させた。がしかし何もしないで諦めることはいかにもくやくしく、新幹線の切符もとってあったので、「行ける所まで行ってみる。」と家の者に告げ、七時前に車を寄んだ。駅に着くまで、団地の外へ出るのが一番大変で、やっとの思いで駅に着いた。それからの東京駅までの時間は電車

が止まらないようにと、祈るような気持ちですごした（勝手なものである）。祈りがきかれて予定どおり、雪の東京駅を定刻に出発した新幹線の車中の人となった時はホツとした。ここから始まる三日間に思いを馳せ、ワクワクとした気分になった。小田原あたりからは雨で、雪の心配は東京から遠ざかるほど消え、目的地の近江周辺では、「今年は雪がなくて暖かい」と逆の現象になっているのを知った。

年頭にプロテスタントの超教派の集まりがあり、念願かなってはるばる琵琶湖畔までやってきた。受付をすませオリエンテーションからは始まり、翌々日の閉会の時まで、密度の濃い時間を過ごしたが、疲れたのは耳から入るイントネーションの違う言葉の響きだった。出席者の多くが関西以南の人達で、異文化に入った東京育ちの自分をこの時ほど感じたことはなかった。「会の趣旨」は各自が毎朝まず聖書に向かい、神様へ祈ることを守っていく為に、祈りとみことばに徹し、小グループになった時にみことばを通し与えられた恵みを語る―というもので、騒がしい、忙しい日常から離れ、テレビも新聞も見ない静かな内的な時間が重ねられた。全国でひらかれているこの会の関東地域での集会に出席したのが初めてだったが、それから十年、毎朝まずみことばに向かう習慣はここで教えられ、

生活の基本となっている。又、語られるメッセージを聞くのも深く心の中に入る様な経験をしていたので、ひとことも聞きもらすまいと、学生にもどつた様な意気込みであった。実際三日間に語られた事はノートにして十ページ以上になっていた。

早朝六時から集会が始まる。百人余りが揃って静かに祈り会を持つ。そして三日間メッセージジャーとして四人の牧師が用いられた。その中のリーダーである師のはじめのメッセージにふれた時（七、八年前になるが）、隣に座っていた男性が感嘆したように「なぜこんなに僕の中にメッセージが入って来るのでしょうか」と初対面の私に言い、私も又単純で明快な語られた言葉に感動していた。キリストがまさに生きていて語っている様な思いになった。もつと近づき、もつと話を聞きたくなった。語られた言葉に感動するのにこの時の親しみは何なのだ・・と考えた。そこには威圧するような力としてのものは何もなく、神様の愛と優しさに心が呼び起こされ涙するような喜びの体験であった。そしてあのメッセージを期待した（師はその後もこの会の中心である）。

ところが今回は前のようなメッセージからの感動を受け取ることはなかった。語られる言葉には説得力があり深い思索を促されるのに、前のように近づいて行

きたいとは思わなかった。何故だったのか―それは違和感として感じた力だった。他を圧倒するもの―講壇から（高くなかったが）降りて来た時足早に去る姿があった。周りから「先生、先生」と呼びかけられ寄つていく人達がいた。対応は丁寧なものに思えず（過労との心配が上っていた）、時にはスターのようであった。多分偉くなられたのであろう。そしてそこに自信という力がついたのではないかと思つた。けれどその為には神の光を放つような彼の魅力は失われてしまつていた。自らが力を持ちたい誘惑に片足をとらえられた様なもの、両足がとらえられてしまわないようにと祈りのうちにある（よけいなことと言われそうだが）。

それともこれは私の大いなる誤解なのだろうか、各々が深く静かな時間を持つ事が主眼の聖会だから、私も家事から解放され充実した時間を送る事が出来、行けてよかつたと感謝した。多少の失望はどこにでもあるのだ。今回の失望は悲しかったが。

ところが帰つてまた昨年亡くなつたマザーテレサの本を読み返していたら、全く別のもの―最初の時師から受けたもの―があつて間違わなかつた信仰者としての姿勢を手本として見る事が出来嬉しかった。「聖女の真実」と題されたこの本は、上智大学で教鞭を執る神父により書かれたもので亡くなる少し前に出た本

である。

「みなさん、アカデミックなことをよく研究していただきますネ。素晴らしいことです。でも私はそんな話はいりませんよ。私が話せるのは私が行なっていることだけですよ」この前置きで始まる講演のあと何人もの男性達が、後に続いた著名な教授の神学のはなしが色あせ聞けなくなつて会場を抜け出した。マザーテレサの余韻に浸りたいためで、それは彼女の「ライブ」のみに感じる出来事らしい。マザーテレサの魅力はこちらが彼女に惹かれて以上、こちらがこちらに関心をもつて、こちらに魅了されていると思わせる力がある。見上げる様なところにありながら手の届く気さくなおばあちゃんでもある。又、文中写真家の沖守氏が一九七四年にカルカッタを訪れ、「死を待つ人の家」を訪れた時の驚きも記している。

「僕は施設の中に入り、ほとんど飢えとその上結核におかされ、死寸前の骨と皮だけにやせ衰えた人々が数十人、ベッドに横たわっているのを見た。そのベッドの周りを、笑顔のシスターたちが、食事や薬の調査、あるいは病人たちの話し相手にと忙しく立ち働いているのを見た。スूपものどに通らない老人の手をしつかりと握り、目と目で会話しているのを見た。その光景に、ぼくは全身から血がひいて、意識が薄れる程の

感動を覚えた」

マザーはただ愛する。あなたは私の半身であること、私はあなたの半身だという徹底的な関わりを通して、神の半身であることを知らずのだ。イエスの愛が言葉で語られる必要はない。全身から溢れる慈しみは、たとえ言葉がなくても、その眼差しや物腰を通して、わたした心にノン・バーバルの磁力となって染みわたる。存在を知ることによって幸せな気持ちにさせる人、―それがマザーテレサという人なのだと思う。私が今回の聖会の中で牧師に感じてしまったものは、この著者によれば『愛を説き、「非日常」のなかで宗教活動をしていると自負しているながら、身近な人たちを蔑ろにしたりする人がどれ程多いことか。表舞台で人助けをしていながら、その一方で家族をはじめ、ごく身近な人たちに思いやりをもって接しないのであれば、神の愛を語る資格などないのである』という事になる。私にとって最初に出会ったときは深い体験であったものが今回は頭だけを通り過ぎた経験になってしまった気がしている。マザーテレサに惹かれるのは裏も表もない、人との関わり方、大勢ではない、ひとりひとりに関心を持つことの出来る人としての愛をみるからだろうと思う。

毎週、日曜日の朝、クリスチャンの番組が三本放送

される。二十万人を牧する韓国の牧師と日本のエリート牧師と、もうひとは柔らかな語りには様々な信仰者を紹介する、東京近郊の牧師である。彼らはよくしゃべる、しゃべりすぎると思う。彼らの活躍をもしまザーテレサが見ていたら、なんと言うかしら―などと思う。韓国の世界最大と言われる教会の牧師は行くところ行くところ首からレイをかけられ、ロールスロイスでご登場である。キリストは小さなるばに乗ってエルサレム入城であった。時々華々しすぎてあんぐりしてしまう。自己顕示と力への渴望は男だけのものではないだろう。しかしこの余りに対照的なインドの聖女の働きを見ると、はるかに凌駕した彼女の母性を見る思いになる。こんな苛烈なまでの愛を母から感じられたら、私はどんな風になっていたのだろう：と思ったりする。まるで時にはライバルのような母娘の疲れた関係のなかにいて安らげる母なるものにあこがれ、惹かれるのである。

女性の性差別の内面下の現実

渡辺 典子

本来だったら昨年二月頃すでに、この冊子に「日本のケガレ意識と仏教」を書いているはずだった。しかし私はその時期に、二名の男性僧侶の暴力により身体に傷を受けたため、右手が不自由になり、何よりも信じがたい出来事に平静さを欠いていた。また後に、加害者と接触しなければならぬ恐怖は、いたく精神を動揺させ、涙が止まらないなど不安定な日々を送っていた。そして一年たった今も、加害者との接触は、大変苦痛であることに変わらない。このことを知った僧侶仲間、心を傷め、励ましのお手紙やお電話もいただいたが、電話で僧侶と話すことさえいやだった。そしてその後、流される心ない教団の中の女性の、事件に関する噂話や中傷に、相も変わらず激しく揺さぶられている現実である。親鸞聖人の「悪人正機・正因」のみ教えを共に聞き、世の中の不合理な人間の在り方に、怒りをもっていった同朋の係わりのはずであるのに、何ともお粗末なこの出来事は、私の僧侶として生きる誇りさえ奪っていく。事件よりほぼ一年を経過しよう

とする今日、古くからの友人僧侶の励ましを受け、やっと気力が回復しつつあるため、まだ詳細について多くは語らないが、本来の私の仕事にも関連する「真宗教団の男性支配の歴史と女性の性差別を内面化している現実」について、不十分であるが論じたい。また前述の事件により、奥田先生をはじめ会員の皆様に、ご心配とご迷惑をお掛けしたことに、心からお詫びし、お礼を申し上げたい。

真宗教団は歴史上、親鸞聖人以来、男性の宗教者と女性（住職の妻）というカップルで寺院が運営されている場合が多い。宗祖が「破戒」とされてきた妻帯を公然化したため、夫婦で道場運営や布教を営むことになる。つまり、伝統的に性差を前提とした分業を基礎としている。その内実は、「家父長的なイエ」（住職Ⅱ教義・法要中心）及び、女性の性別役割（坊守・寺族女性Ⅱ門徒接待、雑用）への期待を内在化して成立してきた教団史を持っている。

これを現在の真宗教団の状況把握のために、具体的な数値をもって検証してみよう。一九四七年、女性にも住職・布教使（法話会の講師）の道は拓かれるが、全住職の九十八%が男性であり、女性の住職は二%に満たない。布教使を例にとれば、一九九六年十月一日現在、総数三一三一人中、男性二九九一人、女性一四〇

人という数字でおわかりいただけのように、圧倒的に男性中心に教団が構成されている。制度的には女性に道は拓かれていたのだが、現状において、单身女性の場合、公的に意見対立した場合でさえ、住職、坊守の双方からのいやがらせを受けるのが実状である。坊守である住職の妻は、たとえ僧籍をもつていても、寺院や住職に依存している場合が多いので、单身女性の足を引く張る場合が多い。

それゆえ女性布教使や僧侶は、男性中心の会合の席では、性により差別的な扱いやセクハラ（言動・行為）を受け、また女性中心の会合では、そのマジョリティが坊守であるため、どちらに属することも困難で中途半端な位置に置かれる。また男女共、年功序列型、男性優位の価値観に立脚しているために、私の体験から言えば、年輩女性によるいやがらせ電話や、相手の夫を講師に推薦しなかったために、私に向けられた暴力は、異様であるし、他の学会・研究会・市民運動体にはあまり例のない人権意識の低さである。それは私が考えている以上に、彼女達が教団にアイデンティティを持ち、常に一体感を持たねばならない使命感に燃え、年功序列型支配を内面化し、社会性が欠如し、対話能力がないことを示している。そしてこれらの初期の女性の自己の婚姻を相対化する主体性の欠如、ま

た対夫への対話能力のなさは、個人の資質であろうか、その世代の共通の歪みであろうか、今の私の力量では分析は不可能である。

一般社会（男性優位価値観）の中で生きなければならぬ人間として当たり前の感受性をもった女性なら、すでに性差別を感じてきただろうし、婚姻や日常生活レベルにおいて、そのような考え方に立脚してきたライフ・スタイルを確立する努力をしてきたはずである。そのことは取りも直さず、「世間の目」というリスクをも背負った一般社会通念との格闘の生き方の選択であろう。

しかし二十一世紀も近い現在、夫の地位、つまり婚姻によって自らの地位を得た女性は、時として、自分の力で教団進出をしようとする女性の大きな障害となっている。

「ブラック・イズ・ビューティフル」「吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ」などの人種差別、部落差別からの解放思想の価値観が、常に一般社会の価値観を転倒させるものとすれば、女性であることへの誇りを得るためには、女性自らが社会性と人権感覚を獲得しなければならぬ。

私の経験した年輩女性の酒席でのからみや、気に入らないと言って暴力を振るう姿は、何ら男性のする女

性へのいやがらせと変わりない。もし違いがあるとすれば、地域社会の中でご門徒より、「寺の奥さん、坊守さん」と甘やかされた結果、自らの人間性の未熟さを脱却できないでいる故なのかも知れない。

前述の男女共々は、他者との水平な対話能力に欠け、社会的な謝罪もできないし、しなくても済むという社会性の欠落がある。それは「住職」（家父長的宗教者）と「坊守」（母性主義的女性役割）を肯定した前近代的意識を温存した特権体質に生息しているからなのだ。彼らの大人としての責任能力の無さは、本人の幼児性ばかりでなく、寺院社会のもっている歴史性や習慣に依拠してきたことは言うまでもないし、狭い村落共同体的な支えが彼らの世界観であり人間観であることは、何とも哀れなことである。

そしてこれらの狭い世界観に依り、創り上げられた仲間意識が、男性支配の教団社会の中で、一個の人間として、僧侶として生きようとする女性の大きな障害となっている。

近年、働く女性の増加や核家族世帯の増加などによって、これまでの性別役割分業に支えられた家族機能の見直しが進められ、女性の社会進出や結婚観の変化に伴って、家族の在り方も変わりつつある現代社会において、多様な生き方を選択する人々が増えている。

しかし私の所属している真宗教団の現実には、「御同朋・御同行」は単なるスローガンであり、世俗的権威中心の世界である。

結論を言えば、これらの障害の克服は、教義、制度、習慣、地域性など様々な観点から分析されなければならぬ。本稿では甚だ不十分と言えるが、真宗教団において女性が性差別を内面化し、女性の教団進出を妨げている現実を考察した。今後、これらの課題をもつて様々な角度から、「仏教と女性」の係わりを論じていきたいと考えている。

在日アジア人との共生のために

パク ウイリア（仮名）

私は現在フリーの立場で日本に滞在しているアジア諸国の人々の生活に関わる相談を受けている。過去十数年は主に在日朝鮮人二世の生活経験をもとに、在日朝鮮人の様々な世代の方々の抱える問題・課題に関わ

ってきた。一昨年からビルマすなわち現在の公式名称であるミャンマーの方々との関わりが多くなってきた（ここではビルマと書くことにしたい）。

滞在ビザ、職探し、居住差別に関する事その他、健康問題、出産、日本での子供の教育の事など様々な生活上の悩みや解決したい問題が多くある。日本語でのコミュニケーションの限界や日本社会の様々な公的機関とのやりとりに変な困難を味わっておられる方が多い。都市の公的機関での外国人に対するサービスは数年前より確かに向上しているように見受けられるが、まだまだ改善しなければならない点が多い。

日常生活の場面で、日本社会で長く生活してきた人々のほんのささやかな手助けやアドバイスによって問題が解決し、何よりも心の安心を得て再び彼ら、彼女たちが今度は自らがチャレンジして日本での生活を着々と歩んでいく姿を見ると、日本でビルマの友人たちとの触れ合いが深まる喜びとともに、私自身いつも勇気づけられていることに感謝を覚えている。

そのような関わりの中で昨年のある日、仕事の帰りに年輩のビルマ人僧を訪問した際、日本人の若い女性二人と年輩の男性客が来るので通訳をして欲しいと頼まれた。ちょうど良いときに来た私は来客を待った。話の内容はつまるどころ、僧を訪れた二十代後半の

女性の祖父が第二次世界大戦の際、ビルマ国内で戦死した。東京にビルマ人の僧がいるというのでそのことを聞いてもらいに来たと言った。

僧は彼女の悲しみを受けてから、「いつまでも戦死した祖父のことを悲しんでいるのではなく、あなた自身のおすべき事を進めなさい。私はビルマから来日した僧であるから、祖父の代わりと思つて安心しなさい。機会があったらビルマにもおいで下さい」と慰めと励まし言葉をかけられた。

それからしばらくして、ビルマから六十代から七十代の二人の僧が日本を訪れ、前述の僧のもとに一ヶ月ほど滞在された。その間様々な所を訪問されたのだが、中でも靖国神社に案内した日本人の年輩の男性の話が今でも私の心に重くひっかかっている。その年輩の日本人というのは（先ほど述べた）ビルマで祖父を失ったという女性を伴ってきた親戚の方で、彼は戦時中ビルマに兵士として送られ、戦後無事に帰還を果たしたのだという。そのような理由からたびたびビルマ人僧を訪問されているということであった。

その後私はその方に何度か会う機会があったのだが、ある日彼は、私にビルマから来日した二人の僧を靖国神社に案内した時の写真を何枚も見せながらうれしそうに話し始めた。とりわけ彼が自慢したかったのは、

今年一月の大雪の翌日、ピカピカに磨き上げられた機関車の前で、なんとも言えぬ表情で写っているビルマ僧の写真であった（日本人男性の最大の関心は機関車にある）。

私はかつて日本軍人であった彼の喜びの感情と、ビルマ僧の冷静な心の波動とのギャップを感じて、背筋から冷汗が流れそうになった。

その機関車というのは、なんと第二次大戦中に日本がビルマとタイの国境に数万人ものビルマ人を強制動員させて作らせた泰緬鉄道の開通式に使われた「記念すべき(?)」第一号の機関車だというのだ。C5631というこの機関車は戦後ビルマから日本に帰還し、「昭和五十四年七月三十一日」に靖国神社に奉納記念と記されて展示されており、彼をはじめかつて泰緬鉄道の指揮等に関わった軍人仲間らが今でも毎月一度この機関車を磨きに靖国神社を訪れているという。

私のビルマの歴史、とりわけ日本占領下のビルマの状況についての知識はわずかであるが、信頼できる参考資料の中から二冊ほど手短かに紹介したい。

家永三郎氏は『戦争責任』（岩波書店、一九八五年）の中で日本のビルマに対する責任について次のように記している。

「ビルマ人をはじめは日本軍を解放軍として歓迎し、

独立のために積極的に日本軍に協力したが、日本の圧制への不満がつのり、インパール作戦後、日本軍が潰走しはじめると、ビルマ軍は反乱を起こして連合国軍とともに、日本軍をビルマから駆逐する戦列に参加するに至った。ビルマ人も結局日本のビルマ侵入がビルマ人解放を真の目的とするものではなく、対英戦争のためにビルマを利用したにすぎないことを看破したのである。

日本軍はここでもビルマ人に様々の巨害を与えた。ビルマ人が今日まで忘れないのは、泰緬鉄道の難工事である。この工事には、イギリス軍などの白人捕虜も多く使役されて死んでおり、連合諸国軍との関係でも非難されているが、日本軍に協力していたビルマ人労働者が同じような虐待を受けたのであるから、ビルマ人が怒るのは当然であろう」と前置きし、「労働者」としてこの難工事に参加した体験を持つビルマ人作家リンヨン・テイツルウインの作品『死の鉄路 泰緬鉄道ビルマ人労働者の記録』の訳文の一部を抄出している。以下に記しておこう。

「労働者たちは、私の考えによれば三つのタイプに区別できた。（中略）第三は（中略）強引に捕えられてきた者たちで、彼らが最も多数派であった。（中

略) 日本兵は私たちを手荒くあつかった。ほんの些細なこと、往復ビンタを食わせたり、軍靴で蹴り上げる、眼の上を空手でたたくなどの暴行を加えた。(中略) 橋の建設にとりかかってからは、私たちも(中略) 雨の降らぬ日には夜十時、十二時まで作業を命ぜられたし、時には夜明けまで作業が続いた。徹夜の仕事のあとも翌朝キャンプへ帰るわけではなく、さらに働かされ夕方六時から七時によく解放されるのだった。(中略) 激しい雨がやや勢いを弱め、やむことが多くなってくる頃になると、日本軍は橋梁建設を必死に進めた。(中略) 私たちの隊は二日二晩作業をやった後もキャンプへ帰してもらえず、眠ることも許されなかった。(中略) 雨と湿気の雨季、乾季の寒さのあと、今度は暑く乾ききった気候に苦しめられている頃のことだった。ジャングルの中で何ヶ月も重労働をさせられ疲れ切った労働者たちは、やせおとろえ、もう人間とは思えぬ姿になってしまっている。(中略) 身にまとうシャツなどなく、ドンゴロスを巻きつけて僅かに腰をおおうのみ。皮膚は灼けひからびて腹はふくれ、アバラ骨が浮き出ている。足には筋肉も見られず膝が異常に大きく見える。(中略) 吹出物や傷が体中にでき、針をおとすところもない。すえたような悪臭が体中強く漂っている」

家永三郎氏はつづけて「こういう衛生状態の中で病人の続出するのは必然であるが、コレラと天然痘が発生すると、日本人は患者を病棟に置きたがらず、キャンプから追放した。日本側で定めた規則に違反した労働者に対しては、縛ったまま川の中に投じたのち、日本兵が腹や胸を踏みつけ、意識が戻るとまた川に投げたり、あるいは木に縛りつけて、三日から七日間水も食物も与えず放置したりするなど、『地獄図のような仕打ち』を加えた」と述べて上記の書の冒頭に掲げられた独立指導者アウン・サンの演説の言葉を以下に明記している。

「日本の軍国主義者たちは、その体制を維持するために泰緬鉄道を建設した。この鉄道工事に我々ビルマ人が何万人となく『汗の兵隊』として引っぱられた。言葉には言い尽くせぬほどの様々なやり方による残忍な暴行と使役を受けたため、泰緬鉄道工事現場でビルマ人労働者三万人ないし八万人が飢えにさらされ、みじめに死んでいった」

この他に根本敬氏の著作、現代アジアの肖像一三一「アウン・サン」(岩波書店、一九九六年)の第三章「日本占領下の現実と苦しみ」においても当時の歴史的背景やビルマ民衆の苦しみと戦いについて詳細に論じられている。

同書には泰緬鉄道に関して次のように述べられている。

「この他、タイとビルマを結ぶ軍需物資輸送ルートとして計画された泰緬鉄道建設工事における強制労働も、徴用された人々とその家族を肉体的、精神的に苦しめた。ビルマではこの工事に強制動員されたビルマ人のことを『汗の兵隊』と呼んでおり、その辛さはアウン・サンの『枕木一本についてビルマ人一人死んだ』という比喩的表現に表されている。この工事で死亡したビルマ人の数は確定できないが、数万人にのぼるものと推測される（ビルマ側の書物では八万人と記されている）」

同章には日本占領下における経済の悪化に伴ってビルマ人の日常生活が圧迫されたことその他、日本兵によるビルマ人女性たちに対する暴行、民衆に対する拷問やビルマ人の民族性を無視した数々の行為によって、日本軍への反感を生じさせた事実についても論じられている。

思い起こせば、かつて「従軍慰安婦」とされた多くの若い朝鮮人女性たちが日本占領下のビルマに送られて酷使された事実が知らされたことも記憶に新しい。

— 新たな関係を築くために —

先ほど述べた写真はC5631機関車のアップの写真とともに「おみやげ」としてビルマ人僧たちに贈られた。

以上の件に関してビルマ人僧たちがどのように感じ、何を思ったかを私は知らない。また現在の時点でかつて日本軍人としてビルマに送られた日本人男性に日本占領下でビルマ人が味わった苦しみや靖国神社に案内したときの事、彼のビルマ人に対する認識について直接話をするには時を待たねばならない。

言うまでもなく、在日朝鮮人女性としての経験からこの一件を視る時、あまりにも多くの疑問、問題を感じている。そして日本で生きている私は在日ビルマ人の人々やいまだにかつてビルマで良い事をしてあげた「誇り」と喜びにとらわれた彼や、被害の意識で悲しみのただ中にあるばかりの彼女のような若い世代の人々にどのように向き合い、努力していくべきかについて改めて考え始めている。

日本の政治や教育、そして私も深い関わりを持つ宗教が、かつて日本軍人としてアジア諸国に送られた世代と戦争体験を持たない若い世代の日本人に何を伝え、どのような生き方を示してきたのかを、再び問い直している。そして近、現代日本の歩みが、アジア諸国の人々から視る時、どのように映るのか？ ひとひと

りの自己と他者との関係に対する認識、思想、意志、行動が問われていることは言うまでもない。自己変革を伴った努力が他者との歪んだ関係を（優劣意識、差別、偏見）正して両者が対等に向き合い、分かち合つて生きていくカギであると思う。

今回の体験を通して改めて私自身これまで知ろうとしてこなかったビルマの人々の歴史（一八二四年から三回にわたる英国Ⅱビルマ戦争、英緬戦争を経たイギリスの植民地統治、日本による占領、現代史）をふまえ、日本で生活しているビルマの人々との対話を続けながら、互いに協力し合つていく関係を築いていきたいと考えている。

いまだ残る日本とアジア諸国の人々の対等な関係の構築にとつてもう二度と起こしてはならない認識と行為を識別し、繰り返し返される無知の悪循環を断ち切り、自立と分かち合いの知恵を自らのうちに育んでいく努力が必要不可欠であることを実感した。

先月一月一四日の寒い朝、ヤンゴンでの再会を願つて挨拶を交わし、次の訪問先ソウルに旅立つ二人の僧を見送った。

頷いてくださいますか

山田 恵子

二十数年前、大学に入つてまもなく私は重症の五月病にかかった。当時の私にとつて人生の目的はただ、大学に入ることであつて、入つてしまえばほとんど老後状態だった。実家を離れて一人暮らしを始めたことも、失恋したことも、孤独感を深めた。そんなある日、大学のキャンパスで一枚のトラクトを手にして、私は教会を訪ねる。生まれ育つた故郷のS市では六年間、教会に行つたり行かなかつたりを繰り返していたので、教会は結構私の好きな場所だった。

大学のあるX市のその教会は、礼拝出席者が三、四十人のプロテスタントの教会で、大学町にふさわしい、学生や若い研究者の多い教会だった。牧師の中井師は三十代前半、インテリ風の線の細い人で私は好きではなかつたが、教員には同じ大学の人も何人かいて、私はすぐに仲間に溶け込んだ。教会の教えはぼっかりと空いた心の空洞に染み渡り、私はようやく、自分の存在が確かに受けとめられているという安心を得たのだった。

受洗しようとは決意するのにそれほど時間はかからなかった。それでも私が実際に受洗した教会はX市の教会ではなく、六年間行きつ戻りつしていた故郷のS市のプロテスタントの教会だった。何も考えずそう決めた。二十歳のときである。

たぶんそれはS市の教会こそが私の信仰的成長の土台であつて、無意識のうちに、牧師のI師が、私を暖かく理解し受けとめてくれると判断したからだと思う。当時I師はばりばりの壮年の三十八歳だった。堅い信仰を謙虚さと優しさの真綿でくるんだような方だった。

X市の教会で私は九歳年上の多田という男性に出会う。多田は物静かで熱心なクリスチャンで、X市の短大で英語教師をしていた。当時の私はとても若く、青く、物事を教えてくれる年上の男性が好きだった。それに自分が短気な性格だったので、生まれてから一度も怒つたことのないような多田の穏やかな雰囲気にも惹かれた。

やがて私は多田と恋に落ちるが、私の心はすぐに冷める。きっかけは些細なことだったが、一旦生じた多田に対する疑問は、あつという間に大きく膨らんでいった。ちようど実家に帰る機会があつたので私はI師に、そんな混乱する気持ちを打ち明けた。クリスチャンとしては立派な人なのに、初めは好きだったのに、

一旦冷めてしまうと何もかもが嫌になり、申し訳ないがもう好きでも何でもない。I師は黙って私の話を聞いていたが、

「わかりました。恵子さんがそう思うのは何か他にも原因があるのでしよう」

と言つてくれた。私は肩の荷が下りたような気持ちだった。I師が頷いてくれればそれでOKだった。私は無意識のうちに善悪の判断をI師の中に求めていたような気がする。

しかし多田は簡単には引き下がらなかった。逃げる私、追い掛ける多田、ますます嫌いになる私。「私は今まで結婚しなかったのは、佐々木さん(旧姓)と結婚するための神様の計らいだったのです」と言われてからは恐くなって、私は何でもI師に相談した。

会わなくなった多田からはいろいろなものが届いた。手紙、電話、電報、プレゼント。多田はS市のI師の教会にもはるばると予告もなしに訪ねて行つたという。多田には以前電話で、

「佐々木さん、愛とはどういうものだと思いますか」と尋ねられたことがあつて、

「そんなこと一言じゃ言えません」

と答えたら、その言葉を以てI師に、

「佐々木さんの私に対する気持ちが変わっている証拠

です」といったそうだ。多田は一晚教会に泊まって翌朝早く、礼も言わず出ていったという。

「迷惑ですからもう電話しないでください」といったことから電報が届いた。「ワタクシノコトキニスルナカレ。テンゴクデアウヒマデ」という文面だった。早とちりした私はそれを「私の如きにするなかれ・・」と読んで、自殺の予告かと思った。同じ下宿に住む年上の女性と二人、交番に駆け込んでパトカーで多田の自宅へ。そこには、それより先に連絡してあった多田の教会の中井牧師が着いていて、多田を静かに教え諭していた。

その後、多田は直接私に連絡を取るとはなかったが、実は私の教会のI牧師と多田の教会の中井牧師との間では、いろいろと悶着があったらしい。I牧師は一度だけ漏らしたことがある。恋の発端は誰が作ったかとか、誰に責任があるかとか、見当違いのことまで中井牧師に責められ、思わず私をかばって多田にこそ責任があると答えたという。I師の口から他人を非難する言葉を聞いたのは、後にも先にもこの時だけだった。

当然のこととは言え、教会もごく普通の人間の織り成す人間社会の縮図だった。争いも憎しみもある世界だった。

一方、私の実家には多田からクリスマスチャン新聞が毎月届けられ、何と私が三十二になるまで続いた。I牧師にどうしたらいいか伺ったが「あれはいい新聞ですから読んだらいいですよ」といわれ実家の母は、十数年の間、毎月毎月それをごみ箱に捨てていたという。

ところで多田とのトラブルの少し前から、私はX市で客員会員として通う教会を中井牧師の教会から別の教会に変えていた。ところがこの、変えた先の教会は重々しく権威主義的な雰囲気のある教会だった。男女の自由な交流は禁止され、恋愛結婚は許されていないという。何もかもがこの調子だった。そんなわけで友達も出来ない教会で私は孤独で、礼拝への足は重くなる。

大学ではK G K（キリスト者学生会）に入り会員五人で活動したが、今考えると何を活動していたのか思いつかない。

一度、I師ご夫妻が私の下宿を訪ねて来られたことがある。I師は三十代後半になってようやく、交通の便の悪い田舎での宣教のために車の免許を取り、中古の小型車を運転していた。その車ではるばる四時間あまりの道程をX市まで運転して来られ、日中は私が客員として通う教会に挨拶され、夜はK G Kの仲間たちと歓談された。私の狭い下宿部屋にご夫妻で泊まられたので、私はその晩は友達の部屋に泊めてもらった。

翌日三人でI師の車でX市の近郊を観光する。思えば至福の時であった。

その後私は別の男性高木と知り合い、やがて彼は私と同じ教会に通うようになる。高木は私と結婚するためにはクリスチャンでなければならぬと知ると、さつさとその教会で受洗した。結婚する前に婚約をしておくべきだと言われると、指輪を買ってきた。そんなふうに必要な手続きだけをどんどん固めていく人だった。けれども私の目には、高木がキリストの救いを信じているように見えなかった。

形だけは整った高木との交際と不安を私は再びI師に相談する。ある日I師からは分厚い返事が届く。ところが開けて読んでいくうちに、何だかわけのわからないことが書いてあって、よくよく見ると、封筒の宛名は私だったが、中身は別の女性の教会員に宛てた手紙で、やはり恋愛と結婚についての相談に答えたものだった。同じ封筒に私宛てのもう一通の手紙が入っている。動転した私は気が付くと、宛先違いの手紙を丸めて捨てていた。その後I師には十数年後にしてようやく、手紙を捨てたことのお詫びを言う機会を得た。

I師の牧する教会は、開拓伝道で建設した教会で、若い独身の教会員がほとんどだった。私のような、ああでもないこうでもないの恋の相談がとめどもなくあ

つたに違いない。

こんなふうには山のような迷惑をかけたI師であったのに、私はやがて教会に行かなくなる。あの威圧的で若やいだところの全くないX市の教会にはうんざりだった。礼拝出席は当時の私にとってマストだった。それが一回その禁を犯すと罪の意識が芽生え、だからと教会に行かなくなると、ますます罪の意識が重く心にのしかかる。ついに実家に帰っても母教会にも顔を出さなくなる。I師の心配もうるさかった。もういい、信仰を捨てよう。何もかもチャラにしよう！ そう決めると心は軽くなった。私の五月病はもうすっかり治っていたし、人生は目の前に悠かに広がっていて、生きがいはそこかしこにころがっていた。こうして私のクリスチャン生活は二年半で終わった。

その後紆余曲折があつて私は仏教を知り禪を習うようになる。それでも、時が経ち、キリスト者であった青春と呼ばれる時間が、遠い思い出として形づくられてくるにつれ、自分のハチャメチャな青春と、洗礼という儀式まで通して誓ったキリストとの約束が、思いがけなく浮かんでくることがあつた。

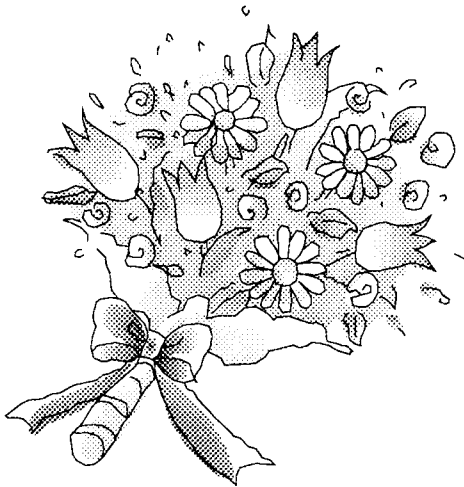
ある禪の師家は、やはり若いころキリスト教の洗礼を受けているが「私は未だキリストの直弟子であると考えている」と著書の中に書いている。仏教とは「何でも

アリ」の世界であるが、そこまで拘束のない教えであるだろうか。同じくキリスト教の洗礼を受けた身ではあるが、私は自分を未だキリストの弟子とは恥ずかしくて言えない。

昨夏、私は十年間に書きためたエッセイをまとめて自費出版した。専業主婦から自分の仕事を得て経済的に独り立ちするまでをメインテーマに、信仰の葛藤をサブテーマに据えたものである。私は迷いに迷ってその本をI師のもとに送った。何度も教会に戻ろうと試みながらも、ついに戻れなかった放蕩娘の詫びと離縁願いのつもりであった。しばらく経ってI師からは一通の手紙が届いた。私の封を切る手が少し震えた。責められても負けないぞ、と思った。

しかしその手紙は「懐かしい山田恵子さん」という言葉で始まっていた。I師は戻らない放蕩娘をそのまま受け入れて下さっていた。そして読み進むうち、私が仏教に辿り着く過程でキリスト教が否定的媒体となったことさえも「よしとすべきと考えます」と頷いてくださった言葉に出会ったとき、長年のI師に対する負い目が熱い涙となって流れた。I師にかけた山のような迷惑が走馬灯のように浮かんで消えた。キリストとはこのような優しい方であったかと、この時私は初めてイエス・キリストの愛に触れたような気がし

た。



(文中仮名)

― 例会報告 ―

① 九月二十八日例会

『「従軍慰安婦」と宗教の位置』

① 九七・九月二十八日

『「従軍慰安婦」と宗教の位置』

池田恵理子さん

○ 発表の概要

九月二十八日（ウイメンズプラザ）の例会では池田恵理子さん（NHKエンタープライズセンター、プロデューサー）がお話をされた。

○ 質疑応答

◆ はじめに

○ 参加者の感想より

今まで『慰安婦』関係の番組を七本ほど作ってきた。取材の過程で、又制作を通して痛切に感じた事を話したいと思う。（私自身は無宗教であるが、各国の政治問題や社会問題を追っていると、それらとその土地の宗教とが密接に関わっている事が多く、宗教には無関心ではいられない。私なりに勉強してきた。）

② 九七・十二月十四日

『仏教のなかの性差別―曹洞宗の場合』

中野優信（優子）さん

○ 発表の概要

◆ 「慰安婦」問題に関わる事になった契機

八〇年代後半、「アジアからの花嫁」や韓国の労働運動などの取材で、韓国の女性運動の高まりに触れた。その頃から、東ティモールの独立運動を取材し番組を作ってきたが、虐殺の陰でインドネシア軍によるレイ

○ 質疑応答

ブが多発したにもかかわらず、それがなかなか表に出ない、という状況を知った。このような問題をどう世界に伝えていけばいいのか、という問題意識を持つようになった。一九九一年、金学順（キム・ハクスン）さんが初めて「慰安婦」だった事を名乗り出てからは、「慰安婦」問題の証言集会や勉強会などにも通う様になった。九五年、E T V特集で埴谷雄高氏のひとり語りが番組になった後、彼が私たちスタッフに「大岡昇平は『レイテ戦記』で人肉食までは描けたが、レイプや慰安所のこととは書けなかった」と語っていた。それが心に残った。その直後に阪神大震災が起こり、この取材中に戦後五十年の間、日本がさぼってきた重要課題のひとつが戦争の加害責任、とりわけ「慰安婦」問題だということを感じた。被害エイズの取材が九四年に山場を迎えた事もあり、国家犯罪の構造としてはよく似ている「慰安婦」問題に本腰を入れようと思った。

金学順さんたちが日本政府を相手に提訴したことを機に、多くの被害者が来日して証言を行い、当時の実体を語る様になった。以来、韓国、台湾、インドネシア、中国、フィリピン、在日韓国人の被害女性達と、旧日本軍人、軍属達などを取材してきた。

◆「慰安婦」問題の普遍性

九五年北京での世界女性会議では、紛争地域や軍事独裁下でのレイプや性拷問が各国の女性達から告発された。その時に「慰安婦」問題のもつ普遍性を強く実感した。又、旧ユーゴやアフリカ、南アジアなどのように、宗教対立においても敵への攻撃の手段として強姦が起きている。慰安所によく似たシステムも作られている。

◆宗教は性暴力の被害者を救えるか

アジアの国々の民主化とフェミニズムの高揚により「慰安婦」問題が国際的にも知られる様になったが、加害者が名乗り出るのに半世紀をも要したのは、被害を告発しにくくさせてきた性規範（男性支配原理が濃厚な宗教的倫理観、道徳観に基づく）が強かったからではなかったか。大きなトラウマをかかえて戦後を生きてきた元「慰安婦」達は、汚れた者として自分を卑下し、苦しんだ。家族や共同体も被害女性を受け入れず、排斥した。宗教の性規範がそう思い込ませているとしたら、宗教は彼女達に対してどの様な癒しを与えられるのだろうか。

◆日本人の性意識と仏教

元日本兵や軍人、軍医たちには「慰安婦」に対して加害者であるという罪の意識が欠落している。まれにみる規模で行われた国家犯罪と、それを犯罪として意識できない日本人の性意識、性風土は日本の宗教（仏教、儒教、神道）とどう関係するのか。いまだに名乗り出る事さえできない多数の日本人「慰安婦」の存在は、日本人の性意識が戦前からの男性原理に強く呪縛されている事を示しているのではないか。

◆「慰安婦」問題に関わり始めた仏教徒達

韓国「ナヌムの家」の女性達は精神療法のひとつとして、慰安所での辛い体験を絵に描く事で苦しみを克服しようとしている。現在、その作品が「ハルモニの絵画展」として全国二十三カ所を巡回している。開催には浄土真宗大谷派の僧侶達が関わった。又、八月に大谷派は「慰安婦」問題に対する戦争責任と謝罪の声明を出した。これまで「慰安婦」問題に関わってきたのは多くがキリスト教徒だったので、絵画展をきっかけに仏教徒達が動き出した事は注目される。仏教徒が女性への性暴力の実態を知り、仏教と性意識、仏教における性差別を考える機会を持つ事は歓迎したい。日本の男性の性意識とそれを受け入れて内面化している女性の性意識、そしてこうした性風土の形成に大きな役

割を果たしてきた宗教の改革なしに、「慰安婦」問題の解決の方向も性暴力や性差別根絶の道も見いだす事はできないだろうから。

○質疑応答

Q「日本の性風土が、というより日本の中の家父長制が、と捉えた方が正確ではないか。又韓国（民主化運動）と違って日本のフェミニストの現実問題への視点の弱さ、運動体の弱さもあると思う。」

Q「日本人「慰安婦」が名乗れない一因は加害者である日本のその中の被害者という立場が非常に微妙だからだと思う。」

A「大変深い問題だ。婦人相談員をしている知人がいて、彼女の体験を聞いたことがある。日本の敗戦のころ、満州にソ連軍が攻め入ってレイプが横行した。日本人たちの中で「ソ連兵相手の慰安所を作らなければ」という段階まで来た時、ある旅役者の女性が「自分達がそれを引き受けましょう」と人柱になってくれた。しかし、日本に引き揚げる時になると、日本人たちは、彼女達を軽蔑した。そういう現実を

目の当たりにした事がきっかけとなって、知人は売春する女性たちを救済する今の職業を選んだと言う。日本人の「慰安婦」が名乗れない背景には様々な要因がある。彼女たちの状況も複雑で、多くの問題が解明されていない。慰安所制度の実態が明らかになり、フェミニズムも力を持たなければ事態は変わらないのではなからうか。

Q 「「慰安婦」問題は謝罪と補償だけで済む問題ではない。心の慰めというものは宗教家がすべきではないか。私は今、『慰安婦問題で宗教家は何が出来るか』というシンポジウムの開催を考えている。」

Q 「たとえばフィリピンとタイとは同じ仏教国でありながら、タイではエイズが非常に多いなど、売買春容認の風土がある様に思える。」

A 「アジアからつれてこられる花嫁さんの問題で、同じく仏教国のスリランカでは運命論的な考え方が強いと感じた。女性は性被害に遭っても前世からの因縁とあきらめて、訴えようとしなない。もっと宗教家、研究者がこのような被害に対して信仰をもつ者がどう向きあうのかを探っていく動きはないものか、という思いがある。」

Q 「それは仏教が、というより、他宗教でも同じで、むしろ経済などの問題からきていると考えるべきだ

と思う。」

Q 「自分は根本的に『宗教は誰をどのように救済してきたのか』と聞きたい。個人的な安心や慰めに終始して社会変革等に向かわないのが今までの宗教の歴史ではなかったのか。」

A 「私はやはり宗教は救済に向かってほしいと思ってる。私が心打たれるのは、『心の平安』という意味の救済ではなく、東ティモールの様な困難な場で生きている宗教。命がけで信徒たちを守り支えながら闘う宗教者の姿に、それこそが宗教ではないかと思っただ。」

○参加者の感想（抄録・敬称略）

「いろいろな貴重なお話を有り難うございます。ビデオを観たりお話を聞いたりし、涙が出て来ました。

元慰安婦の方々の苦しみや深い愛憎を思いました。

（田中みよ子）

「今日のお話、大変心に沁みました。私は足立区で地域女性史を学んでいます。昨日も女性史グループ十一団体の集まりがあったのですが、行政と協力して女性史を作る時、「慰安婦」問題はタブーの様にされている話が出て、私達の弱さを乗り越える努力をしようという発言した所でした。私の父はフィリピンで戦死したのですが、フィリピンの元慰安婦の方の名乗り出が非常に多い事を最近知り、衝撃を受けています。これからもっと学ぶ事の必要を痛感しています。（宮崎黎子）

「仏教の歴史に於いて、女性がどの様に扱われてきたかを考え続けてきた。今日のお話を伺う事で問題点に更に光を当てられたような気がする。又今後どのような実践が可能なのかについても示唆を頂いたと思う。男性僧侶にも今日のお話を聞いてもらえたら良かったと思う。私の周囲の人達には伝えていきたい。（小

澤治慧）

「慰安婦の問題はそのこと自身も大きな問題であります。その背景にある『日本的なるもの』はつきりとはわかりにくいですが、しかし、しっかりと我々の意識を支配しているものをどうしても感じてしまします。戦後半世紀も過ぎたのに、日本のフェミニズムの高まりのない中で、様々な社会のユガミやウミがどう出せるのでしょうか。今日の話はとても動かされました。（渡辺秀子）

「宗教とは何か？という宗教の本質を、女性への性暴力というコンテキストにおいて展開された池田さんの問いかけは、二一世紀の宗教の構築にとつて避ける事のできない問題提起であると思いました。（木村公一）

「池田さんが熱意をもって「慰安婦」問題に取り組まれる理由が、話を聞きながら納得がきました。日本人「慰安婦」がなぜ名乗れないかは、私自身ずっとひっかかっていた点です。一言で言って名乗れない社会だ、という事。個人（女性）の人権が民族や国家、加害／被害構造などを越えられる日を本当に早く実現したいと思いました。（金英姫）

② 十二月十四日例会

『仏教のなかの性差別―曹洞宗の場合』

(「寺族」問題をめぐって)

○発表の概要

十二月十四日(ウイメンズプラザ)の例会は新潟県新津市で曹洞宗の僧侶をされている中野優信(優子)さんによるお話だった。

一 はじめに

出家主義を標榜する曹洞宗においては、僧侶の婚姻・世襲や「寺族」問題について、触れられることを拒む風潮にあった。実際に世襲・婚姻などが行われていながら、出家主義が枷となって、問題の本質に触れられることがタブー視され、宗門の根幹に関わっていないから、問題として取り上げられることがほとんどなかった。

「寺族」問題に関する論議も、宗門の現状維持のための「保護」論議に終始し、「寺族」のほとんどを構成する女性自身の立場から考慮されることがなかった。ここでは、これまで等閑視されてきた僧侶の婚姻・世襲について触れてみたい。

(なお、「寺族」は僧侶の家族で僧籍を持たない者(多くが女性)とし、「寺庭婦人」の語は男性僧侶の配偶者(妻)として、使用することとする。「寺族」「寺庭婦人」に括弧を付しているのは、これらの語に「妻帯」の語と同様の女性的な問題があり、今後再考の要があると思われるからである。―中野)

二 「寺族」の現状

これまで「寺族」問題といえば、後継者問題、住職死後の「寺族」の処遇問題、あるいは「寺族」の教団内における位置づけの問題などを示していた。だが、これは僧侶あるいは教団の側から見た場合の問題点であつて、女性の立場からの実際の「寺族」問題は、教団・男性僧侶側の見解とはかなり異なった様相を呈している。それは以下の文章に端的に示されている。

「おかあさんは、いつもねむい顔をしています。そしてぼくたちに『大きくなったらお寺のあとつぎなんかしなくてもよいから、おまえのすきなように生きなさい』といいます。『どうして』ときくと、『おまえのおよめさんになる人がかわいそうなもの』といいました。」

これは、ある若い「寺庭婦人」からの訴えの一部で、彼女の子供が書いたとされる作文である。彼女の訴え

には厳しく切迫した状況が示されており、この作文が彼女の状況と全ての問題点を代弁しているように思われる。この作文には、母親の疲労困憊と本心の吐露がよく表れている。又、彼女自身からの直接の訴えも挙げられている。すなわち「日曜も休日もない」生活による疲労、住職夫妻との軋轢、住職の言行一致、夫（副住職）の無関心、家族の団欒の欠如などである。こうした厳しい状況から、彼女は幼い息子に後継者として寺院を継承させることを拒否するのである。

また、宗門誌に投稿された別の文章がある。それは宗門男性僧侶の望む「寺庭婦人」のあり方に批判を加えている。この記述では、精神的肉体的苦悩のみ多くて、報われることの少ない「寺庭婦人」の生活の実態が自らの体験に即して語られている。信仰的生活の実践できる「理想的家族形態」を夢見て宗門僧侶と婚姻関係に入った妻が、実際の寺院の生活に幻滅していく様子が述べられている。さらに、寺院に「嫁す」ことが「家政婦がわり」の意味しか持たないことや、寺院に生まれ育った人々が、「ややもすると一般社会の常識に疎く、尊大な感じが見受けられる」などと鋭い指摘と批判を行っている。

このように、僧侶の家族（特に妻）にとって問題は、過重な家事（寺院の雑務を含む）労働と、僧侶の抱え

る矛盾点にあるのである。そして、これこそが「寺族」問題であり、これは性差別の問題なのである。

三 「寺族」と世襲

男性僧侶が「寺族」に期待した役割の一例を挙げてみよう。

精舎に住んでいる住持と寺族の生活そのものが布教の指標であります。檀信徒が住持の説教を聞いて成程寺族が住持の云っているとおりの生活をしていると肯けるようであれば、逆に檀信徒が聞いて鼻持ならぬ思いをすのでありましょう。

これは「寺族研修会」における講演の一部である。寺の生活が「布教の指標」となるべきだと説いているが、僧侶の家庭生活の虚構性はすでに指摘されている通りである。また、信仰の自由を認めながら、「寺庭婦人」には「お嫁さんも寺へ嫁した以上、「信仰の自由」もありません。」と、矛盾したことを述べている。これは家觀念から脱却できない男性僧侶の思考を明確に示している。さらに、「寺族」が本堂で法事を行っている様子を皮肉り、「あくまでも、住職が能化者であり」、「奥様は教化のコーディネーターであってほ

しい」と、僧職への越権行為を戒めている。

僧侶のこうした「寺族」への観念はどこからきているのか。それは、世襲と婚姻によって、男性僧侶に大きな「うまみ」があるからである。世襲が寺院の経済と継承、さらには男性僧侶の婚姻の問題と密接に関わっているためでもある。「寺族」に疑問を抱かさず、その問題に触れられずにいられば、男性僧侶は自らの生活がほぼ安定している理由を再認識する必要もないし、その必要性さえ感じず一生を送ることさえできる。

これは、彼ら自身が「衆生救済」という僧侶と寺院の宗教的使命と、世襲制とが大きく乖離していることを知っていることの裏返しでもある。それでも世襲を維持しているのは、男性僧侶にとってこれが一番楽な方法だからである。男性僧侶は婚姻によって、本来僧侶として自分が行わなければならないはずの寺の雑務などを、配偶者である「家庭婦人」に肩代わりさせることができるからである。性別役割分業という日本社会の性差別的通念が、ちょうどいい逃げ道となっているのである。さらに世襲制のメリットとして、実子を弟子とすることによって、後継者を得ることが比較的容易になることも挙げられよう。

四 むすび

以上のように、多くの男性僧侶にとって、「寺族」の存在は、寺院を物理的に維持し、また父系血統を維持するために「有用」なものとなっている。彼女らの「便利」さは、僧侶としての宗教的内省でさえ凌駕してしまうのである。

現在、日本のほとんどの寺院が性別役割分業観による家父長的家制度の残滓の上に世襲制を維持しており、信仰の名のもとに配偶者（妻）と子に負担を強いっている。宗門と男性僧侶は、「寺族」問題が世襲制と男性僧侶自身の婚姻観に深く関わっていることを認識して、「寺族」問題に取り組んでいかなければならぬであろう。

○質疑応答

Q キリスト教徒だが、全体の仕組み、差別観がとても似通っているのを実感した。キリスト教の場合、宗派を超えたネットワークはあるが、仏教の方はどうなのか。

A 今のところ、宗派を超えたネットワークはありません。

Q 僧侶全体に占める女性僧侶（尼僧）の数を教えてほしい。

A 曹洞宗の場合、一割はいないと思うが、それでも仏教界の中では最も多い。

Q 中野さんのお寺では水子供養はしていますか？

A していません。父が興味がないのと、自分がそれほしくないでくれ、と言っている事もあって。

（井桁さんの補足：曹洞宗では教団として水子供養はしない、という方針を数年前に出している。）

Q（外国人で曹洞宗の僧侶）「正法眼蔵」を読むと、そこでは『女人結界』をはつきり否定している。そういう事も紹介してほしかった。『女性がセクシヤルな存在なら男もそうではないか。女性のみに関界を強いるのはおかしい』とも言っている。

Q 教義から差別が生じたというより、社会、政治的な事から、それを仏教内に取り込んだという考え方の法が正しいのではないか。

Q 本日の様に、資料を引く事自体への疑問だが、キリスト教の聖書研究、原書批判に比べ、仏教の經典批判はまだプリミティブな段階ではないか。

A 同じように考えている。釈尊自身が書き残したものはなく、すべて伝聞の形だ。釈尊が言われた事を当時の民衆がどう受け取ったかなど、社会や時代が反映されている。それらの中から釈尊自身の考えを抽出するという研究が今後もっと重要になると思う。

Q 道元の言葉に「只管打坐」という言葉がある。ひたすら坐ればいい、ということ、時に現状が見えなくなるという点もある。その辺を心に留めながら明日から又坐っていききたいと思う。今日はありがとうございました。

紙面の関係で参加者の感想は省略致しますが

「仏教の中の性差別がよくわかりました。多くの資料も示して頂き、参考になりました。ありがとうございます」

とうございます（田中みよ子さん）」

他、多数いただきました。

前号(No.24 「暮らしと宗教」)への感想

たかはしとしえ

くらしということを縦軸にして考えた場合、(歴史ということを横軸に) 私に限っていえば、宗教は生きて働いている。私は強く関心を持って女性関係の考えの類に触れてきたが、宗門の学ができていない。しかし一九八五年の国際トランスパーソナル学会で、パネラーの米国女性が、思いがけなく道元の只管打坐がトランスパーソナルには有効だと強調した時、大いにその発言に啓発された。(この時に本会のパンフの呼びかけに応じた)そして、私と禅仏教との縁はあったのだと確信した。

以来折にふれて帰山したり、日常をできるだけ行息に添うようにとの日々である。そんななかで只管打坐が観念として働いてしまうこともあるが、単に、「気の持ちよう」を越えて、職場や家庭での自分の処作に働き、ああ、あの時「坐るということ」で良かったとふりかえることしきりである。

おはようからごめん下さいまで(立禅)も生きて働いている。だからこそ、シングル女性の私は、まず、

くらしという縦軸から家庭への切り込みの視点を常に怠ってはならないのではないかと、自分がある意味で律している。

無常ということや、フェミニズムということがすんなり縦軸に寄り添い、そして帯状に横軸となる日々が訪れて欲しい。今の私にはまだ宗教「・」フェミニズムということと、フェミニズムはことばに変える意識の内に存在している。

一九九七年十月十一日記

◆お便りを有難うございました。

今号の内容はいかがだったでしょうか。反論や共感、どのようなお便りでも結構です。皆様の御感想をお待ちしております。

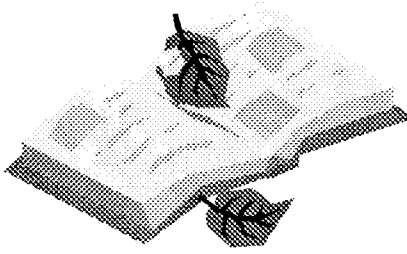
(編集担当)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

新刊書案内

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

本誌に会員の新刊書のコーナーを設けてもいいのでは、というアイデアが寄せられ、今号から掲載する事にしました。昨年、今年と書籍等を上梓された方は奥田さん、あるいは編集担当の方までご一報いただきたいと思います。



●緊急トーク集会

「日本万歳！」史観を問う

昨年の二月七日にフェミニズム・宗教・平和の会と共催で、「日本万歳！」史観を問う」という緊急集会を開きました。自由主義史観と自らを名付ける人々が年末に「新しい歴史教科書をつくる会」を結成して、出版やテレビを用いて華々しい宣伝を繰り返していったから、これをほおっておいてはならないという危機感から、急いで企画したのです。約二百名の参加者と熱気に溢れる時間を共有しましたが、その会の忠実な記録を出しましたので、希望される方は左記まで振替にてお申込み下さい。当日の発題者は、鈴木裕子、徐京植、富山妙子、松井やよりさん等です。皆様には是非お読み頂きたいと思います。

振替 No.・00110・4・94097 / 口座名・キリスト教アジア資料センター / 頒価・五百円 (千込み)

『烈士の誕生―韓国の民衆運動における「恨」の力学―』真壁祐子著

平河出版社、一九九七年六月（四、五〇〇円）

「烈士」とは元来「利害や権力に屈せず、国のための節義を堅く守る人」を意味する韓国語だが、本書が取り上げるのは七〇年代以降の民主化闘争における抗議の自殺者や非業の死者たちである。儒教倫理を裏切る「先立つ不孝」がいかに合理化され、いかに死者たちが「烈士」として祀り上げられるに至ったかを、膨大な一次資料の渉獵と遺族たちへの面談調査によって浮き彫りにした。それは朴正熙による六一年のクーデター以来三〇年余りにわたった軍政VS民衆の葛藤の歴史であり、金泳三政権を経てついには「金大中大統領」を誕生せしめた韓国政治運動過程のエトス―「恨の力学」―が明らかにされる。

『パンク坊主宣言』蓮月(藤谷不三枝)著

同時代社 一九九七年十二月（一九〇〇円＋税）

「ヤマギシ」「法の華」の現場にとびこみ、宗教カルトをメッタ斬り。又『愛欲の悩みのない信心なんて』（蓮月語録）と言うように、筆者の筆致はタブーと言われる領域にも臆せず踏み込み、これまで体験した事、感じた事をエネルギーッシュに読者に語りかけている。その一方、筆者は真摯に救いと癒しのあり方を求め、親鸞復興への熱い想いをも語っている。

目次には「小林よしのり氏へのたより／私が作る私のお葬式／宗教カルトとわたし（統一教会とオウムを勉強しよう）（オウム擁護の文化人）（ヤマギシ会）／おんなたちの原風景（セクシュアリティを語る）」など

「異色づくめの本に見える。でも蓮月さんは『どうしてこれが異色なの？』と問いかける。自然体の彼女の前では、女の痛みを知らない男やカルト擁護の文化人こそ異色に見えてくる」（浅見定雄氏の推薦文）

ご注文は書店に申し込むか左記へ

著者連絡先 E&Fax 06-992-1946

同時代社 TEL 03-3261-3149/ Fax03-3261-3237

『マイノリティとしての女性史』

奥田暁子編 三一書房（三二〇〇円＋税）

「自由主義史観」を主張する亡霊が出現したことで、歴史の改竄や歴史の隠蔽という問題が極めてわかりやすい形でわたしたちの前に提示されることになった。これまで「正史」とされてきたものについてもだれの視点から見た「正史」であったのかが問われなければならない。歴史の「真実」というときにも、わたしたちはその「真実」の中身を徹底的に問わなければならない。

本書は「近代を読みかえる」シリーズ（全3巻）の第1巻である。今日は先の見えない不透明な時代であるが、わたしたちが未来に向けて展望を開いていくためにも、過去の歴史を新しい視点から読みなおすことが必要である。「近代を読みかえる」はジェンダーの視点から近現代という時代を読みなおすための試みである。

ジェンダーの視点から歴史を読みなおすということは、男と女の関係を支配・被支配の関係だけで見ることでもなければ、これまでの男性の歴史に女性を付加することでもない。それは「正史」を編み出してきた

視点そのものを問い直すことも含めて、フェミニズム思想・運動以前の歴史を相対化し、わたしたち自身の現在を脱構築することである。

長い間、女性は歴史研究の中で周縁的存在であったが、とくに周縁に位置づけられてきたのは沖縄、被差別部落、在日朝鮮人、障害を持つ女性たちである。本書の前半ではこれらの女性たちと、北海道開拓や足尾鉍毒事件に関わった女性たちなど、主としてマイノリティとして生き、闘ってきた女性たちに焦点が当てられている。

本書の後半は女性と労働の問題を取り扱っている。労働は男性だけでなく女性にとっても生存の基盤であるが、労働者としての女性はフェミニズムの運動が起こって三〇年以上を経過した今日においても依然として周縁的存在である。とくに性別分業は近代以降に強まったと言われているが、その実態はどうなのか、現状を変えていくことは可能なのか、もし可能だとしたら、どんな道を辿るべきなのか、そしてそのような道は近代的労働のあり方を止揚できるのか、といったことを明らかにしようとしている。

第一巻の執筆者は全部で十人。なお、第二巻「近代日本の性幻想」（近藤和子編）、第三巻「国家と女性」（井桁碧編）が続刊の予定である。

『国際分業と女性』

マリア・ミース著、奥田暁子訳

日本経済評論社（三八〇〇円＋税）

昨年の終わりに起こった拓銀、山一の倒産は日本の経済不況の深刻さを物語る出来事であった。今や、不況からの脱出が政府や経済界をあげての合い言葉になっている。ところが不況を乗り切るために政府が実施しようとしているのは、年金支給開始年齢の引き上げと給付の引き下げであり、老人までも含めた介護保険料の自己負担である。

現在、日本の労働現場では、能力給や年俸制を導入した賃金制度の見直し、長時間労働の拡大、雇用調整と労働協約のフレキシビリティ化、外部委託の利用の拡大などの深刻な事態が急速に進行しつつあるという。とくに女性に関して言えば、正規の賃金労働者からの排除が進み、パート、アルバイト、派遣などの外部労働への差別化が進んでいるという。それは賃金が相対的に低い女性にとつては、男性以上に長時間労働に従事しなければ自立は難しいということであり、「主婦化」が一層進むということである（「主婦化」とは男性を稼ぎ手、女性を男性に扶養される主婦と見なし

て、女性には正規の賃金労働者としての賃金が支払われない状況をいう）。

『国際分業と女性』は家父長制と資本主義との関係（ミースによればこの二つは別々のシステムではなく、資本主義的家父長制という一つのシステムとして理解しなければならぬ）を歴史的、経済的に分析したものである。本書では、資本主義システムは家父長制の基盤なしには有効に機能しないこと、資本主義的家父長制を維持、発展させるために国際分業と性別分業が不可欠な要素であること、「主婦化」は国際資本の戦略であることが明らかにされる。そして、「主婦化」はいずれ男性にも拡大すると予測している（この予測は日本でも現実になりつつあるのではないだろうか）。これらの分析は、なぜ男女の賃金格差が一向に縮まらないのか、なぜ不況になると女性を含めた弱者の立場がますます不利になるのかといった疑問を説明してくれる。

資本主義的家父長制が続く限り、女性の状況がよくなることはあり得ないとして、ミースはこのシステムの解体が必要だと言う。世界システムになってしまっている資本主義的家父長制を解体することなどできるだろうか。ともすれば、わたしたちは絶望的になるが、まずは「成長神話」にしがみつくことをやめて、わた

1997年 活動報告

- 2.7 「日本万歳！」史観を問うトーク集会
(キリスト教アジア資料センターと共催)
- 3月 Womanspirit No.23 発行
- 6.1 例会 岡野治子さん
「キリスト教と仏教の間で揺れる西欧の
フェミニストたち」
- 9.28 例会 池田恵理子さん
「『従軍慰安婦』と宗教の位置」
- 9月 Womanspirit No.24 発行
- 12.14 例会 中野優子さん
「仏教のなかの性差別—曹洞宗の場合」

私たちの一人一人が人間らしい生き方を目指すことから始めようと、著者は呼びかけている。

1997年会計報告

《 収入 》

繰越	196,215
会費	197,000
冊子売上	40,770
トーク集会	31,572
例会参加費	12,000

合計 477,537

《 支出 》

印刷費	155,000
送料	54,230
施設費	11,700
文具他	2,904

合計 223,834

現在高 253,703

編集後記

24、25号の編集を山田恵子さんと担当させていただきました。ありがとうございました。

テーマの設定から、ああでもない、こうでもないと思外に難航。(皆さんの方から「今回はこんなテーマに」とか「こんな原稿を書いてみたい」という申し出があると編集の仕事も楽になります。皆さん、遠慮なさらずに！)

一旦テーマは決まっても、誰に原稿の依頼をすればいいのかでまた頭を悩ます我ら。そして最も苦労したのは依頼を承けて下さる方が大変少なかった事です。これには山田さんに骨を折って頂きました。書きにくいテーマだったのかも知れません。

新しい試みは「例会報告」や「お便り」、「新刊書紹介」のページです。

以前から、例会での貴重なお話やディスカッションが欠席者や遠方の方々には分からないというのが残念でした。「例会報告」で会の雰囲気など少しでも伝わったでしょうか。

又、原稿を書くのが大変でも、読後感といった形なら気軽にWOMAN誌に参加してもらえらるだろうと考え、前号に「FAXやお便りをください」と用紙を入

れました。お気づきになりましたか？

こちらが把握できず、「新刊書紹介」に掲載できなかった本も多かったと思います。今後とも情報がありましたらお知らせ下さい。

3月7日の例会で、次号からは奥田さん、飯田さん、平嶋さんが編集を担当して下さる事になりました。奥田さんの責任感の強さには頭が下がります。飯田さん、平嶋さん、フレッシュな感覚でガンガンやって下さい。

最後になりますが、今までの編集の方々のご苦労の分かる一年間でした。WOMAN誌や例会運営など長い間奥田さんが担当されていた事を思いますと、当会は大黒柱の奥田さんに頼りすぎでは。

将来、会員の一人一人が出来る範囲で当会を担い合い、奥田さんを頼らずにやっつけていけるようになるのが理想ではないかな、と僭越ながら思ったりしました。

千葉悦子

追記

今年度の年会費(3000円)がまだの方は振り込み用紙を同封しますのでよろしくお願ひします。

Womanspirit No.25

一九九八年四月発行

発行 フェミニズム・宗教・平和の会

連絡先 〒一八〇一〇〇一四

武蔵野市関前五―五―二五 奥田方

T/F 〇四二二(五三) 八七四六

〇〇一七〇一八―八〇三一

六〇〇円

郵便振替
定価

刷 (有)オクノプリント社